様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１日現在

機関番号：54501
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19529003
研究課題名（和文）　中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究

研究課題名（英文）　A Basic Study of Chinese Literature Written by Japanese in the Middle Age

研究代表者
仁木　夏実（NIKI　NATSUMI）
明石工業高等専門学校・一般科目・講師
研究者番号：40367925

研究成果の概要（和文）：中世前期（院政期より鎌倉時代中期頃）の貴族社会における漢詩文について、その全体像を明らかとすることを目指し、その製作の背景、特にこの時期同時多発的に現れ、その後定着した「絵の前」という文学製作の場について考察を行った。また、文庫等に所蔵される資料の調査を行い、内閣文庫蔵「十番詩合」や水府明徳会蔵「詩集」といった、従来学界にほとんど知られることのなかった資料を見出し、重要なものについては紹介を行った。

研究成果の概要（英文）：It aimed to assume the whole image of the Chinese literature in the patriciate at the first term of the Middle Ages (From Insei-Ki period in about the middle of the Kamakura age) to be clear, it appeared in the frequent and simultaneous occurrence at the background of the production, especially this time, and the place of literary production established "In Front of the picture" was considered afterwards. Moreover, the material owned by private library was investigated, "Jyu-Ban Shi-Awase" owned　Naikaku-Bunko and "Shi-Syu" owned Suifu-Meitoku association that had been occasionally hardly known to academic circles so far was found, and it introduced the important one.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,000,000	420,000	2,420,000

研究分野：日本漢文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：院政期漢文学・鎌倉時代漢文学・儒者

１．研究開始当初の背景

平安時代後期から鎌倉時代、いわゆる中世前期の漢詩文に関する評価は、従来決して芳しいものではない。白居易の安易な模倣が流行した、王朝漢詩文の爛熟・衰退期であると目されることが多いのが現状である。無論、和歌との交流や注釈等この時期に特徴的な事象に注目し、来るべき中世学芸の先駆として評価する研究の進展は近年目覚しいものがあるが、その一方で当該期漢詩文の全体像の把握が進んでいるかと問えば、その答えは否であろう。今なお、中世の日本漢詩文といえば、禅僧らによるいわゆる五山文学という一方に大きく偏向している傾向は強い。本研究は、こうした現状では全く閑却されてきたと言ってよい平安時代後期から鎌倉時代か

けての貴族社会の漢詩文に注目し、その実態の解明を目指すものである。貴族社会、という言葉には、京都の宮廷を中心とする社会に止まらず鎌倉に下向した儒者等の活動をも含む。そのことにより、中世漢文学研究に新生面を切り開くことが期待される。

作品が残っていないわけではない。この時代のキーワードとしてしばしば「蒐集」という語が挙げられるほど、漢詩文集の編纂は当時盛んであった。『本朝無題詩』や『本朝続文粋』がその代表的なものである。しかし、成立論を中心に行われてきたそれらの研究も現在はひと段落着いた状態にあり、近年発見された『中右記部類紙背漢詩集』、『詩序集』、『猪隈関白記紙背詩懐紙』等については、全体の一部分しか現存していないことも影響してか、いまだ資料紹介程度の研究しか行われていないのが現状である。寺院資料などに残る願文や表白なども含めればさらに膨大な数に及ぶであろう漢詩文が、ほぼ手付かずのまま残されている。

関連資料に乏しいわけでもない。貴族らによる日記や部類記のような歴史資料の豊富さは平安時代初期のそれとは比べ物にならないし、説話集、和歌資料などにも漢詩文と関わるものは数多い。豊かな資料を手掛かりに古代から中世への転換期であるこの時期の文化・学芸を読み解こうとする流れは今や歴史や和歌、説話といったジャンルの壁を超えて進化を、そして深化を続けている。

このような状況の中で、漢詩文研究に求められているのは、何よりもまず、その作者の文学史上における位置づけ、作品の読解といった基本的な作業の積み重ねによって、中世前期における漢詩文の全体像を示すことであろう。

報告者はこれまでに主に平安時代後期の漢詩文について、

（１）儒者と呼ばれた専門的に漢詩文制作に携わった貴族達の伝記研究

（２）漢詩文が生み出された「場」について、特に尊仰する人物の画像（影）の前で漢詩を制作する、いわゆる「影供」という行事の分析

（３）東大寺図書館蔵『遁世述懐抄』をはじめとする新出資料の発見と紹介

という三点の柱に基づき研究を行ってきた。平成１７年度からは２年間に亘り日本学術振興会の特別研究員として、それらのテーマについて調査を行った。本研究はそうしたこれまでの研究の経験と成果に基づき、対象とする時代を中世前期として捉え直した上でその発展と結実を目指すものである。

２．研究の目的

本研究は、平安時代後期から鎌倉時代、いわゆる中世前期、主に京都の貴族社会において制作された漢詩文について基礎的な研究を行うことを目的とする。すなわち、従来看過されることの多かったこの時期の日本漢詩文について、諸所に残る漢詩文資料を収集し、漢詩文制作の実態について整理し、以後の研究の基幹となるデータベースを作成して従来の研究の欠落を補い、当該期漢詩文全体の展望を可能とすることを目指した。

上述の通り、当該期の漢詩文資料は比較的豊富であり、新たな資料の発見も行われている。しかし、それらは個別的、単発的な紹介に止まることが多く、それらを統合し、研究しようとする試みは未だ行われていない。同時期の和歌や説話等の分野で『国歌大観』や『説話データベース』等大規模なデータベースが整えられている現状を鑑みれば、漢詩文においてもそうした収集作業が早急に行われ、当該期の文芸全体への展望が可能となることが望ましい。また、貴族の公的活動に関わることも多い漢詩文について整理が行われることは、同時期の歴史学にも有益であると思われる。本研究における漢詩文の資料収集はその要求に応えるものである。

３．研究の方法

前項「２．研究の目的」で述べた当該期漢詩文に関するデータベース作成を目標とし、主に以下の二つの作業を中心として研究を行った。

（１）現存する『中右記部類紙背漢詩集』、『和漢兼作集』、『猪隈関白記紙背詩懐紙』等の漢詩集はもちろんであるが、その他に説話集や物語、和歌の注釈書、古筆資料、さらには『民経記』や『勘仲記』等多数残されている日記資料類など、これまでの漢詩文研究では看過されがちであった文学資料、歴史資料を精査し、そこに引用されている漢詩文を収集する。資料には活字化されていないものや未公刊のものも多いので、それらについては複写写真などを取り寄せ、場合によっては所蔵先を訪問し、調査するこうした作業には、江戸時代の市河寛斎の『日本詩紀』があり、近年後藤昭雄氏によりその拾遺篇が編まれたが、これらは近江朝から平安時代後期の詩までを収録したものであり、それ以降の詩文を対象とする試みは未だ行われていない。その点でこの作業には大きな意義があり、また多くの困難があった。

（２）当該期の貴族社会における漢詩文制作の担い手であった儒者貴族の伝記研究及び漢詩制作の場についての個別的研究。特に、この時期同時多発的に現れ、その後広く定着した、「絵の前」を製作の場とする文学について、その成立及

び広がりについて考察を深めた。

４．研究成果

前項「３．研究の方法」で述べた（１）の作業を進めてゆくなかで、様々なレベルでの発見があり、その中の重要なものについては雑誌論文及び口頭発表の形で公表した。以下しばらく次項「５．主な発表論文等」〔雑誌論文〕に従って記述する。

①は、豊富な訓点資料を有することでも知られる京都栂尾の古刹高山寺聖教資料中に、鎌倉時代中期の貴族鷹司兼平（1228～1294）作の漢詩二首を見出し、その製作の背景について考察を加えたもの。従来願文の下書きと目されることの多かった資料が漢詩であることを指摘し、さらに、先祖の画像（影）の前での詠であるという点に着目した。その点では研究の方法（２）の成果の一つでもあるが、同時に現在続々と調査報告のなされている寺院資料に残る漢詩文収集の試みでもあった。

②は、鎌倉時代後期に石清水八幡宮の社僧良清によって石清水八幡宮にゆかりの深い漢詩文の中から、およそ四八〇聯あまりの秀句を抜き出し、編纂された『鳩嶺集』中に見える中国僧西澗子曇（1249～1306）に関する論考。厳密に言えば日本漢詩ではないが、所収作の出典についていまだ不明な点の多い『鳩嶺集』について、作品の収集範囲を見極める作業の中から派生した問題点とその解明の試みであった。なお、④は中国で刊行された書に寄稿したものであり、内容的には②と重なる点が多い。

③は、『続本朝文粋』や『本朝文集』に残されたものを中心に、鳥羽院を施主とする法会の願文の記述から、院政期願文に描かれた「治天の君」の罪障意識、ことに鳥羽院におけるその特異性について論じたもの。大江匡房を代表として、傑出した作者の作を中心に読み解き、その特色を明らかにすることを目指すことの多い、当該期漢詩文の研究状況に対し、類似した状況や問題について先行例がいかに取り込まれていたのか、作者間を横断的に捉えることも、院政期前後の膨大に残された作品を読む視座として有効でないかと問うた。

（１）の作業を進める中で、いくつかの資料の発見があった。次項〔学会発表〕②と④はその報告である。

②は、現在内閣文庫に蔵される「十番詩合」という資料の調査報告である。これは、昌平坂学問所に旧蔵された「続群書類従」中、「天徳闘詩」「善秀才宅詩合」「永承応制詩」「天喜殿上詩合」の四つの詩合に続いて見出されるものであるが、用紙、筆ともに明らかに他の四つとは異なるものであり、四つがまとめられた後に増補されたものと考えられる。「続群書類従」の諸本中、この詩合を持つものは、彰考館本と内閣文庫本の二本のみである。これまでも存在については言及されており、『国書総目録』にも立項されているが、そこで書名は類似するものの、内容は全く異なる「十番狂詩合」と混同されるなど、その全容についてはこれまで看過されてきた書であった。現存するうち、彰考館本については閲覧が許されていないため、内閣文庫本について調査を行ったところ、判者は「在久」すなわち、鎌倉時代中期の儒者菅原在久（1250～1288）、注を施した「淳範」は同じく鎌倉時代中期の儒者藤原淳範（1247～1315）と見なされ、遺例のきわめて少ない鎌倉時代の詩合であることが明らかとなった。内容は、以下のような特徴を有する。

a　二句一聯を合わせ、在久による判詞、淳範による注を付す
b　連続する二句は同一の作者による
c　韻は全て同じ下平八庚
d　平仄についても、二四不同、二六対等の規則はほぼ守られている

作者は多くが「～也」「～月」という二字名であり、仮名である可能性が高い。そのため、その解明と内容の解釈という課題が残された。

④は、水戸徳川家の旧蔵品を伝える財団法人水府明徳会（現徳川ミュージアム）に所蔵される「詩集」という資料の調査報告である。本集は、貞享三年（1686）に江戸初期の藩主徳川光圀の命により編纂された、奈良時代から近世までの我が国の詩人による漢詩の集成であり、同じく本朝作者による漢文の集成「文集」の姉妹編である。しかし、「文集」が『国史大系』に『本朝文集』として収められ、広く利用されているのに対し、「詩集」については未だその全容すら知られていないのが現状である。江戸時代には、松平頼寛による『歴朝詩纂』（1756 年成立）や市河寛斎による『日本詩紀』（1786 年成立）など、大規模な本朝漢詩の集成が試みられたが、水戸藩による「詩集」の編纂はそれらに先立つものであり、様々な観点からの調査研究が行われるべきものであろう。本発表では、「詩集」の紹介を行い、『歴朝詩纂』『日本詩紀』との比較、及び主に鎌倉時代までの範囲を対象に新出詩についてその意義を考察した。

この「詩集」との出会いは、本研究の方向性に大きな影響を与えた。すなわち、本朝漢詩の集成作業では先達にあたる、これら江戸時代の作業の成果を度外視し、同様の作業を行うのは非効率的ではないかと考えるに至ったのである。無論、これらの集成から漏れた作品も数多いが、それらは拾遺として補い、これら近世における集成作業の重要性を改めて問い直すところから本研究課題をさらに深化させてゆきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 仁木夏実、関于来日僧西澗子曇、『書籍之路与文化交流』（中日関係史研究叢書）、2009、pp.138-155
② 仁木夏実、「鳥羽法皇六十日大般若講願文」における罪の意識―院政期願文における「治天の君」像補説、大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』（和泉書院（和泉書院研究叢書 391））、査読無、2009、pp.167-186
③ 仁木夏実、西澗子曇『鳩嶺集』所収二首制作の背景をめぐって、文藝論叢、査読有、72 巻、2009、pp.64-79
④ 仁木夏実、高山寺蔵鷹司兼平漢詩二首について、語文（大阪大学）、査読有、91 輯、2008、pp.11-23

〔学会発表〕（計４件）
① 仁木夏実、水府明徳会蔵「詩集」について、和漢比較文学会第 29 回大会、2010 年 9 月 26 日、信州大学
② 仁木夏実、絵の前の文学空間、中古文学会関西部会、2009 年 11 月 14 日、大阪府立大学
③ 仁木夏実、内閣文庫蔵「十番詩合」について、大阪大学古代中世文学会第 208 回例会、2008 年 3 月 28 日、大阪大学
④ 仁木夏実、絵の前の文学空間、国際会議「仏教学を越えて―日本仏教研究の新しい方向性」、ハーバード大学ライシャワー研究所／アメリカ合衆国マサチューセッツ州、2007 年 11 月

６．研究組織
(1)研究代表者
仁木　夏実（NIKI　NATSUMI）
明石工業高等専門学校・一般科目・講師
研究者番号：40367925